

## 宮沢賢治とSDGs(2)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

今回は、宮沢賢治が生前に出版した唯一の童話集『注文の多い料理店』(1924年)の中から『狼森と笹森、盗森』を取り上げ、賢治の精神に宿る自然への原初の尊敬と畏敬は、現代のSDGsの精神に繋がっているのではないかと紹介しました。

今回は、ほぼ同じ頃、すなわち賢治が花巻農学校の教諭をしていて、賢治自らが「わたくしが岩手県花巻の農学校につとめて居りました(中略)この四ヶ年はわたくしにとってじつに愉快的明るいものでありました。」と『春と修羅 第2集』の“序”で語っているように、賢治の37年間の短い人生の中で最も明るく光に満ちた時代に著わされた童話『虔十公園林』を取り上げます。賢治の精神性が鋭く研ぎ澄まされた28歳の頃の作品であり、SDGs(Sustainable Development Goals/持続可能な開発目標)の精神に深く関わっているのではないかと考えて紹介します。

### 『虔十公園林』

物語は、「虔十はいつも繩の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいてゐるのです。」と虔十という少年の紹介から始まります。さらに、「雨の中の青い藪を見てはよるこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたいてみんなに知らせました。けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑ふものですから虔十はだんだん笑はないふりをするやうになりました。風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方がないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのです。」自然のままの無垢で無邪気で純粋な童心を持つ少年が生き生きと描かれています。

虔十という変わった名前については、賢治が愛用していた手帳の一つ『兄妹印手帳』の19頁に「Kenju Miyazawa」と読めるサインがわざわざ書かれています。賢治は虔十その人になりたかったのではと考えてもよさそうです。この童話への賢治の心の入れ方が伝わってくるようです。「風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方がない…」の表現は、賢治と虔十がもう一体化して自然と交感しているように感じられます。

虔十は、ある時、「虔十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらゐの野原がまだ畑にならないで残ってゐました。」ことに気づきます。この感性は、少年虔十のみに与えられた自然に対する美意識の発露ではないかと思われれます。この童話の中で、もっとも重要な自然認識へのかかわり方を示しているかもしれません。

ある年、虔十は母親に700本の杉苗を買ってほしいと頼みます。虔十はこれまで何ひとつ頼みごとをしない子だったので、父親は買ってやれと言い、母親も安心したように笑います。虔十の兄も杉苗を植える助言をして手伝います。そこへ百姓の平二がやってきて、あんなに底が硬い粘土のところに杉など育つものでないと言い、周りの人たちもやはり馬鹿だと笑います。ある百姓は、自分の畑が日影になるから杉を植えるなど文句をつけますが、何も言い返せない虔十を見て、兄はかばい続けます。

杉の苗を植えて8年目になっても杉はやはり3メートルほどしか育たなかったため、ひとりの百姓が冗談に、枝打ちはしないのか、と虔十に言います。真に受けた虔十が枝打ちをすると、3、4本の枝しかない、いかにも寂しい杉の林になってしまいました。しかし、畑から戻ってきた虔十の兄は、立派な林になった、いい薪もできたといって虔十に笑いかけ、心で励まします。

ところが次の日、子供たちが虔十の杉林に集まるようになりました。並木道のようになった杉の間を行進するのが、子供たちには楽しくてしょうがないらしいのです。子供たちのラッパの声真似を聞きながら、虔十もうれしくなって笑いました。子供たちは毎日杉林にやって来ました。

ある日、平二が「杉を伐れ」と言ってきました。しかし、虔十は「伐らない」と言って抵抗しますが、平二に殴られてしまいました。これが虔十の一生でたった一度の人に対する逆らいの言葉でした。それからしばらくして虔十はチブスにかかってこの世を去ってしまいました。それでも、杉林には毎日毎日子供たちが集まり遊びました。

やがて新しい文明がこの村にも押し寄せて、鉄道が通り、工場が建ち、生活は便利になりましたが、田畑や家が壊され、村はいつしか町に変わりました。しかし虔十の杉林だけはという訳かそのまま残り、すぐ近くの学校の運動場の続きのようになって、相変わらず子供たちはそこで遊んでいました。

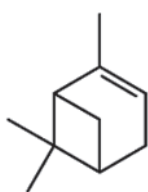
ある日、昔のその村の出身者で、アメリカの大学教授になっている博士が15年ぶりに故郷へ帰ってきました。小学校でアメリカの話をした後、博士は虔十の杉林を見て驚きました。すっかり変わってしまった町の中で、その林だけが昔遊んだままなのでした。博士は懐かしんで林のことを校長に尋ねました。校長は、「こゝが町になってからみんなで売れ売れと申したさうですが年よりの方がこゝは虔十のたゞ一つのかたみだからいくら困っても、これをなくすることはどうしてもできないと答へるさうです。」、だから今でも子供たちの遊ぶままになっていると答えました。

博士は虔十のことを覚えていました。そして昔を偲び、提案します。「あゝ全くたれがかしくたれが賢くないかはわかりません。たゞどこまでも十力の作用<sup>(1)</sup>は不思議です。こゝはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでせう。こゝに虔十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するやうにしては」と。そして、そのとおりとなりまし

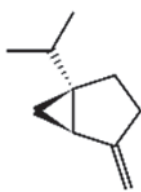
<sup>(1)</sup> 仏教の世界で、仏に特有な十種の智力として知られています。

た。「<sup>ほ</sup>度十公園林」と彫った青い<sup>かんらんがん</sup>橄欖岩の<sup>ひ</sup>碑が建ち、昔の生徒たちから手紙やお金が学校に集まりました。度十の家族は本当に喜んで泣きました。そして、「全く全くこの公園林の杉の黒い立派な<sup>にほひ</sup>緑、さはやかな<sup>なつ</sup>夏、すゞしい<sup>かげ</sup>陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本統のさいはひが何だかを教へるか<sup>あはれ</sup>数へられませんでした。そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすき<sup>とほ</sup>徹る冷たい<sup>しずく</sup>雫をみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝いては新しい<sup>あたら</sup>奇麗な<sup>くわい</sup>空気をさはやかに<sup>はき</sup>出すのでした。」こうして、物語が終わります。

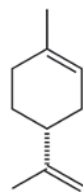
度十が作った杉林の深い緑は人々の目を休め、杉の枝葉からさわやかな匂が漂ってきます。枝葉から放たれる香りは、 $\alpha$ -ピネン、サビネン、リモネン、 $\beta$ -エレモール、 $\gamma$ -オイデスマール、 $\delta$ -カジネンなどの成分が混ざったものです。また、葉の葉緑体からは光合成によって、人々の心をうるおす新鮮な酸素分子(O<sub>2</sub>)が提供し続けられ、子どもたちがその下の月光色の芝生の上で遊びます。美しい風景が目に浮かびます。



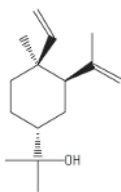
$\alpha$ -ピネン



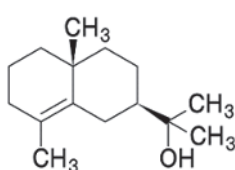
サビネン



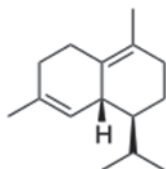
リモネン



$\beta$ -エレモール



$\gamma$ -オイデスマール



$\delta$ -カジネン

この胸を打つ美しい物語は、現代の私たちに、少年の自然に対する美意識を感じさせ、不毛の土地と言われながらも杉を植えた少年の森に共感する人々が森を守り育み楽しみ、今に生きる人々に癒しを与え、持続して森を育てる精神を伝えるさわやかな“種子”を与えてくれています。世界的に森林が減少しつつある現在の地球を思う時、度十の心は本当に大切ではないでしょうか？

この童話を読むと、筆者はいつも賢治の自画像のような詩『雨二モマケズ』が心に浮かんできます。賢治は、農業を本格的に実践するために「羅須地人協会」をつくり、明るい創造的な農業を求めて人々と



につけん教育出版社 (2004)

文化的芸術的にも交流し、毎日農作業をしつつ、農村の人々に惜しみなく肥料相談に応じていましたが、過労のため倒れました。しばらくして回復したため、東北砕石工場の技師として働くことを頼まれ、肥料の炭酸石灰の販売を引き受けますが、無理をして出張した東京で再び発病します。この時ばかりは、賢治は死を覚悟して父母に電話をし、告別の言葉を書きました。花巻にもどって2か月後に、病床で『雨ニモマケズ』が書かれました。死の2年前の事でした。

毎日毎日自らの姿を求めて戦い、自らに問い、表現し、挫折感に悩まされながらも誠実に生きて行こうとする姿は、度十の生き方と重なっているように思われます。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク 決シテ<sup>いか</sup>瞋ラズ イツモシツカニワラッテキル(中略)

アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ  
(中略)

ヒドリノキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ ミンナニデクノボート  
ヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハナリタイ

度十の心と賢治の心がびたりと一致しているように感じられます。

## SDGsと『度十公園林』

SDGsの精神は、「ほんとうの幸せとはなにか？」を現代の私たちに問いかけ、地球環境を守り、次の世代に繋げていく実行の精神を勇気づけるものではないでしょうか？ここに紹介した『度十公園林』はまさにSDGsの精神を体現している物語であり、努力を勇気づける童話ではないかと思います。SDGsの持続可能な目標17項目のうち、『度十公園林』には次の項目が内に秘められているように思われます。

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| 3. すべての人々に健康と福祉を  | 4. 質の高い教育をみんなに  |
| 11. 住み続けられるまちづくりを | 12. つくる責任、つかう責任 |
| 13. 気候変動に具体的な対策を  | 15. 陸の豊かさを守ろう   |
| 16. 平和と公正をすべての人々に |                 |

最後に、度十の最もせつなく最も心に響く言葉を挙げて、本稿を終えます。

「<sup>き</sup>伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」度十が顔をあげて少し怖さうに云ひました。その唇は<sup>くちびる</sup>いまにも泣き出しさうにひきつってゐました。実にこれが度十の一生の間のたった一つの<sup>ことば</sup>人に対する逆らひの言だったのです。